

鳳凰の足 —— 「^{たいしそく}対趾足」 図像の起源と伝播

中野 晶子 (一橋大学)

東洋において古来数多く表象された鳳凰は、文献上は複数生物の合成体（キメラ）と観念されるが、造形上は多くは全身が鳥の形態である。造形に影響を与えた実在の鳥については諸説あるが、時代・地域により鳳凰の姿は大きく変化し、文献上・造形上においても統一的な起源を求めるのは不可能と考えられる。

鳳凰にはある時期より、鳥類学上注目すべき形態を持つものが登場してくる。大多数の鳥の足指は、3本が前方、1本が後方を向く「三前趾足」と呼ばれる足の形状であるが、キツツキ目・オウム目などごく少数の鳥のみは、足指が前後に2本ずつ分れた「対趾足」という特殊な足である。鳳凰も造形例の大多数において三前趾足で表現される（以下、三前趾足鳳凰）が、宋代頃から対趾足を持った鳳凰（以下、対趾足鳳凰）が出現するのである。

足の形状に着目して鳳凰の造形例を概観すると、以下が明らかになる。1点目は、鳳凰の足には三前趾足と対趾足の大きく2系統が存在することである。同じく想像上の鳥である金翅鳥や迦陵頻伽には、管見の限り対趾足の例は無く、対趾足の一派の存在が鳳凰に限られた現象であると言える。2点目は対趾足鳳凰は少数派であること、3点目は対趾足鳳凰の造形例は宋代から見られ、以降日中韓共に見られることである。発表者は宋代の院体花鳥画の中で対趾足鳳凰が生まれ、周辺域へ伝播したと推測する。4点目は、日本では17世紀頃から見られ18世紀に広く認められることである。

日本の対趾足鳳凰の初期例には初期伊万里・古九谷の作例が見られ、中国からの様式上の影響を裏付けるものと言える。18世紀初頭の例は、中国絵画に触れる機会の多い大坂画壇や長崎派の手になるが、本草学の流行や絵本類の出版による対趾足鳳凰の知識の拡大が後続の造形例の増加に繋がったと思われる。18世紀後半には江戸の浮世絵師らの作例も出現する。狩野探幽や伊藤若冲など、双方の鳳凰の存在を認識した上で、自らが描く鳳凰の足を意識的に選択している例も見出せる。狩野派は流派として対趾足鳳凰を採用しなかった一方、守旧的とされる住吉派には対趾足鳳凰が見られる等、各流派が何を規範としたか、絵師間の影響関係の解明の一助となりうる。

発表者は、対趾足鳳凰の普及の背景には対趾足自体の知識の伝播があると考え、古来飼い鳥とされたオウム類に注目する。オウム類の対趾足の知識は『山海経』に既に見られるが、唐代の造形例においても必ずしもその知識が反映されている訳ではない。オウム類が多く描かれるようになるのは宋代以降であり、対趾足鳳凰の出現時期と重なる。日本においてもオウム類が多く描かれるようになった17世紀以降に対趾足鳳凰の造形例が見出せるのである。鳳凰はキメラと観念されるため、様々な種の生物の特徴を取り込みやすい性質を生来的に持っていると言えるが、発表者はオウム類の対趾足を吸収して対趾足鳳凰が出現したのではないかと推論する。